

巻頭言

信州下伊那のキリスト教 竜丘基督伝道館について

田添 禧雄

はじめに

2011年3月をもって、51年の働きを終え日本基督教団隠退教師となり、終の棲家を神戸の地と定めた。

ところがひょんなきっかけから信州飯田の竜丘と伊那の教会へ2011年12月から手伝に行かねばならなくなった。正直なところ当初ヨハネ21章18節の思いであった。

事の起り方は、隠退して暇ができたので、信州をドライブし、親友の見舞いに飯田・竜丘へ立ち寄った。帰る日、教会を見て行ってほしいというので、私もぜひということで教会に行った。そこは竜丘基督伝道館であった。すると教会の役員さんらしい方々がお菓子や果物の用意をしてお迎えくださった。どうして教会を見せていただくだけなのにと訝ったのだが、実は、私は全く知らなかったのだが、竜丘基督伝道館と伊那基督伝道館の役員方が前の週に、「活水の群」の理事長の藤村和義渋谷教会牧師のところへ無牧の両伝道館のため牧師の斡旋依頼に行き、そこで藤村牧師が、今「活水の群」には誰もいないが、「強いて言えば隠退した田添ぐらいかな」と言われたそうである。タイミングよくそこへ私が行ったので、竜丘では田添がさっそく来てくれたと歓迎してくださったのであった。道理で話がかみ合わなかったことが後でわかった。

その結果引くに引かれず、1年半毎月1回竜丘と伊那の伝道館に通い、ついに2013年の5月神戸を去って飯田・竜丘の柘植先生の時代の呼称そのままに継いでいる基督伝道隊竜丘基督伝道館に来ることになってしまった。竜丘伝道館

は、1924（大正13）年10月に柘植不知人先生によって創設され、今年2014年教会創立90周年を迎える。両伝道館は牧師館を新築し迎えてくださった。かつて柘植先生をして竜丘の地を「信州下伊那郡は地形上一区域をなし、すべての天恵に富み、天龍川の上流にして風光もまた自然に備わり、あたかもカナンの地に極似する」（柘植不知人遺著『ペンテコステの前後』150ページ）と言わしめた竜丘にやってきた。すべてのことが神の摂理と思わざるを得ない。

前置きが長くなったが、この竜丘基督伝道館について記してみたい。突然なことで、準備もなく、資料も十分でなく、飯田のことはまだ地理も、風土も、いうまでもなく教会のことも、西も東も分からない者ではあるが、教会創立90周年を前にして少しく纏めたく思い、その覚書として記し、識者に種々訂正、示唆等々、ご教示いただきたく願うものである。いうまでもなく巻頭言にふさわしいと思わないがお赦しいただきたい。

なお、竜丘とは、かつて長野県下伊那郡竜丘村であったが、飯田市に合併し、今は駄科、長野原、桐林、川路などを竜丘と言っている。

日本メソジスト飯田教会

<竜丘村の伝道>

結論から言うと、私は竜丘基督伝道館のルーツは日本メソジスト飯田教会に遡ると考える。すなわち、日本メソジスト飯田教会（現日本基督教団飯田吾妻町教会）⇒飯田基督伝道館（現日本基督教団飯田知久町教会）⇒基督伝道隊竜丘基督伝道館という系譜である。

いうまでもなく、日本メソジスト飯田教会については、『飯田吾妻町教会百五十年史—公同の教会をめざして』（日本基督教団吾妻町教会刊）によく纏められているので、ここでは竜丘基督伝道館に関わる事柄を日本メソジスト飯田教会の歴史の中の資料から検証してみたい。

竜丘村での子供たちへの伝道は、明治42年には竜丘日曜学校の形を成し、合わせて大人の伝道も始まっている。子供約120人、大人は「当村には信徒14人あり。求道者亦数人あり」とある。

「護教」明治42年1月23日913号に次のように掲載されている。

「◎信州飯田教会村部龍丘日曜学校 龍丘村長野原集会所を校舎として。昨

年三派合同と同時に開かれたる当校は、矢島婦人伝道師を校長として、経営され。今年1月7日を以て第2回クリスマスを挙行せり。生徒は時に盛衰あれども、漸次興味を感じつゝあり。又父兄は自己は信ぜずとも、子供の教育の爲めにはよき事と思ひて奨励する爲め、下は5歳頃より。上は15歳位まで。学校付近の子供は子守までも盡く出席し。今年の贈り物は合計120餘點にて。…出席数は農繁の時の外は平均50人計り也。昨年来会友中平省吾氏及昨冬受洗したる小島良造氏は、矢島校長を助けて熱心に教鞭を執らるゝ爲め、校勢頓に発達し。今年のクリスマスの如き著しき進歩を見たり。…矢島校長の奨励を最後として一時生徒をば歸し。後大人三十余人の爲めに演説会を開きたり。初めに内海牧師の「善き葦より善き物を出す…」と云う説教あり。次に小島氏の昨年受洗前後の實驗談あり（略）大分聴衆の心動かせり。終りに小生は「信仰は神の家庭へ嫁入りする様なものなり。（略）」と勧め是れにて閉會せり。因みに矢島姉は毎日曜日毎に2里の道を通ふて、熱心に生徒を教へられ。生徒を歸して後は大人数人と共に、小集会を開くが常なり。当村には信徒14人あり。求道者亦數人あり。…」と竜丘村に信徒が増えてきていることを伝えている。

また、「護教」1910年（明治43年）1月8日963号には、

「龍丘心靈修養會 毎木曜夜20名少なくとも15・6名 日曜学校70名 入会8名受洗10名に至る」とある。

さらに、1911年（明治44年）の年会記録には、

「殊に龍丘教区の一円の如きは克く自修克く研究するの精神に富み毎週一次の集會を務め以て求道を導きつつあるは教団全体の爲に大に益する所あるもの如し本年爾所に於て洗礼者長野原に大人男7名女1名飯田に女1名ありき」と報告されているように竜丘の教勢は盛んである。

「護教」1914年（大正3年）7月24日1199号にも、

「日本メソジスト教会は昨年土地家屋を購し、仮會堂を建て幼稚園をも開き、教勢増々順境に向かひつつあり。野村牧師、山田婦人伝道師同心協力せらる。有力なる実業家を有し居れば将来の發展期すべき也。伝道地竜丘村は小林洋吉氏の盡力するあり。戸数20位の信徒を有し、その村の勢力となり居れり。」と飯田も盛んになりつつあるが、竜丘村も20世帯と成長している様子がうかがわれる。

<小林洋吉>

この原動力は何といっても竜丘村長野原の小林洋吉を挙げねばならない。少し長いが、次男小林正之が『追憶小林洋吉』に記す「洋吉小伝」を紹介しよう。

「明治6年(1873)長野県小林勘一郎の長男として生まれた。明治26年(1893)松本にあった県の尋常中学卒、二松学舎に儒教を、鎌倉円覚寺に禅(師積宗演)を修めたが、20年代末期飯田美以(メソジスト)教会に入門、32年神戸壬四郎牧師の洗礼を受ける。本多庸一・山路愛山に私淑、特に内村鑑三に傾倒、翌夏内村聖書講談会に連泊参加、年末同信の近藤さえ(神奈川県大磯)とキリスト教結婚。その間青年運動に関心、長野原に輔仁会を起こし、また松本時代の同志らと尚志社を設立した。32年(1899)有志と伊那青年会を結成し幹事となり、月刊機関誌「伊那青年」の発行人として精力を傾けた。

明治34年(1901)単身上京東京専門学校(早稲田大学の前身)に入学、37年政治科を卒業(特に浮田和民・安部磯雄に師事、親友に宮下友雄)して帰農。41年(1908)英人宣教師パークレイ・F・バックストンの宗教的人格に惹かれて福岡、広島、神戸方面に三週間の求道旅行、いろいろ幾度か有馬・箱根などのいわゆる純福音の修養会に出席、笹尾鉄三郎・秋山由五郎・御牧硯太郎らに学んだ。この前後竜丘日曜学校を起こし、礼拝のために自宅を開放、家庭から酒を追放、日曜休業を実行。ついでバックストン飯田集会。また求められるまま郡下各地に生活と信仰を語ることほぼ30年。大正4年(1915)総選挙に親友伊原五郎兵衛のために理想選挙運動。7年飯田天幕伝道、このころ好地由太郎と知る。翌年両親受洗、父の死を機会に寺を離れ十字架の墓石とする。

第一次大戦後複雑な請判問題にかかわり、還暦ちかくまでの十年間を苦闘、その間信仰の慰藉を与えられた柘植不知人牧師に全面没入、その落合聖会的影響のもとに大正13年同志とともにメソジストを脱して飯田基督伝道館を起こし、また竜丘伝道館を創立し、自らも新たな恩寵感に浸った。しかし同師没後、伝道館的信仰の燃焼もとのごとくならぬを自責しつつ、農耕と聖書繙読のほかは、次第に書道、俳句、詩吟の稽古に生きた傾きがある。昭和12年(1937)長男誠大陸出征を前に癌の宣告を受けたが、最後の病床約三ヵ月はまことに晴朗自若、凡人求道の一生は報いられた観があった。昭和12年数え年65歳で没し

た。』『竜丘村誌』に基づく（但し細部の誤りは訂正）

この小伝にもあるように、小林洋吉に靈性を与えたのはパークレイ・F・バックストーンである。バックストーンとの出会いを彼はこう記す。「わが心の旅路」より

「またつらつら胸に手を当てて考えた、これで良いだろうか、これでも生ける信仰か、なんだか靄の如く空なる如し。本当の生命如何と。また我を失えり。秋蚕も上ぞくの後繭かきを後にして、飄然名古屋に行き、神戸に行き、遂に『福岡にバックストーンなる人の集会あり、これ君に最適のものなり』と教えられ、花を求むる蝶の如く、道の遠きを忘れて赴けり。

今まで接せし東西の名士教師の地上より出でたる如きに比して、神の国より天下りし如きバ師〔英人宣教師パークレイ・フォウエル・バックストーン＝Barclay・Fowell・Buxton〕の人格に接し、陶然としてひきつけらるるを覚え、この人の言ならば理屈無しに従わんと思えり。この人なら騙されても見よう、また騙す人に非ず。只我が低級さが理解出来ぬ丈なり『只信じて従うべき也』と。これが純福音の下伊那に入る初めであった。」1908年（明治41年）9月である。

<バックストーンによる靈性修養会>

小林はついにこのバックストーンを飯田に招く。「自分の近隣の人々にもこの靈の豊かさを与えて欲しかったのである。」（『信仰の報酬』243ページ）

バックストーンによる靈性修養会については、「護教」1914年（大正3年）12月11日1219号に小林自身による詳細な報告があるが、長文になるので『飯田吾妻町教会百五十年史』の要約を借用する。

「昨年来祈りに祈りて期待せし靈性修養会はバックストーン御牧両氏によりて、11月14日より19日に亘りて開かれたり。14日に御牧氏は自動車にてバ師は（自転車で）大平峠を超へて安着あり。同夜7時開会、御牧氏はキリストを顕わすことを教えられ、バ師は祈りて恵を求むべしと勧めらる。15日朝祈祷会あり御牧師凡てのものを豊かにあわれみ玉う（給う）神、豊かに赦しを与え玉う（給う）神、主の永遠の国に入るの恵みを豊かに与え賜う（給う）神、生を与え且つ豊かならしむる神を紹介され、今汝等の幕屋を張り上げて大いに求めよと勸

めらる。礼拝には、バ師御用に当たられ、新しき心、肉の心を与え玉う（給う）神を讃美させれ一同新たにせらる。午後3時聖書研究会には御牧師の講演有、恵みより堕ちし原因・その堕ちた苦しみの状態、その恢復の始まり、全く恢復して感謝する所などを示され、一同言うべからざる興味を以って反省せり。16日早天祈祷会（御牧師開会奨励）、会衆の生氣著しく加わる。午後はバ師聖霊の賜を示さる。夜は御牧師御用に当たらる。これまでの話は少し聴衆の信仰の程度よりも高きに過ぎたりと見られてにや、汝何處より堕ちしかを憶い悔い改めて初めの工を行え。盡く悔い改めの門に返り信仰の生涯に出立すべしとて其信徒の實際を以て一同警醒せられたり。

17日早天祈祷会、バ師・御牧師よりお勧め。夜はバ師ナアマンの潔めの話。18日朝祈祷会御牧師の話、午後バ師、神の与えし一等切符を持ちながら其一等なるを知らずして三等室に入りて苦勞するの愚を為す勿れ、と会衆覚えず嫣然たり。18日夜バ師神の火に清められて献身せよと教えらる。後御牧師立て恵みの座に招きし70余りの会衆盡くこれに従い、不思議に聖霊の恩化に浴したり。19日早天祈祷会 御牧師安心して神の手に全く託すべしと勧められる。夜は前後の聖別会あり、御牧師神の大路に闊歩すべしと勇ましく励まさる。今まで恵みの集まりで温められても、実生活に帰りて漸く信仰の冷却を覚えし多くの人も今度こそはと必勝を期し得て、幸いなる修養会は終りぬ。此会の出席者、朝は平均15名午後は60余、夜は90を算えぬ。此会費用多く要せし為め、バ師は旅費謝礼を免ぜられ、御牧師と共に非常なる励みを以て御用に当たられたり。深く両師に謝す。又他より来援せられし神戸内海原田三師に負う所多し。又他教会のサロネン高島嬢はバ師御牧師に食事を饗せられたり。今付記して謝意を表す。両師去て後神戸師は竜丘に、内海師は松尾に各出演せらる。近時靈的要求遠近に起り来り、各々神の戦士として弥々益々奮励を要するの時とはなりぬ。」（小林氏報）

大正ホーリネスリバイバル発祥の地飯田

その出来事は、森山諭、島地タイによって記録されている。ここに島地タイによる「信州飯田のリバイバル」の一部を見ると、森山諭の記録と期日や祈りの家（林家）等に違いがみられる。島地は現場にいた人であるから信憑性は高

いと思われるが、本人が「はっきり覚えませんが」とか「何にせよ、40年前の記憶」ともいわれる。

「その夜の夜行で新宿を出発いたしました一行は、秋山師、小原師、柘植師、下平兄に私と5人であったとおぼえます。

飯田駅へ着きますと、飯田教会牧師西条弥市郎師がお迎え下さいまして、教会へ参るのかと思いましたがさにあらず、飯田でもずいぶん準備のために心を合わせて祈っておられました由にて、西条師曰く、準備祈祷のために山の家が備えてありますから、その方へおいでを願うとのこと、その場から山へご案内下さいました。山の家とは飯田駅からは20数丁ほど登りの風越山の中腹にある林家（信者）さんの持ち家で、よるになれば狐の鳴きごえも聞こえ、朝になれば軒下に足あとが見えるのでした。そこで二日二夜の祈り会、実に祈りの霊は濃厚に注がれました。昼は静想会、夜はサタン打ちと名づけた祈り会、ここへ関西から藤村壮七師も参加されました。

秋山、小原、柘植、藤村、西条各師の猛烈な祈り会は、11月下旬の山気身に迫る真夜中というのに、先生方はシャツ一枚の肌ぬぎで皆立ち上がられ、汗をタラタラ流しつつあらゆる方面に働くサタンに対し徹底的に祈りの戦いをされました。その光景は今も私の眼底に残っております。先生方お一人一人の内に主の大いなる能力の満ち溢れておられるのを感じました。既に戦いは勝利であることを確信され、讚美しつつ下山し、その夜から集会は開かれました。」

一方、藤村壮七は、「大正8年柘植先生を送られ、驚くべき栄光を拝した。所謂大正8、9年のリバイバルは此地（飯田）より破れ始め、後東京に移ったのであった」（『ペンテコステの前後』255 ページ）という。当の柘植は「然るに大正8年巡回の使命を受け、各地修養会又は各地集会に於てこの火の流れは遂に大リバイバルの光景を拝するに至った。」（同165 ページ）という以上のことは言っていない。さらに現場の日本メソジスト飯田教会は何も語らない。

日本メソジスト飯田教会の分裂

『飯田吾妻町教会百五十年史』（48 ページ）は分裂の事情を次のように記している。

「1924年（大正13年）の年会記録は、長野野部長北澤鉄治の報告として、

飯田教会の異変の事態を、次のように述べている。なおここには分裂の日時は不明である。

「飯田地区 八木兄（西條彌一郎牧師の後任）新に任命を受け、牧会に当たられしが、同教会内に数年醗酵せられたる信仰上の変動は茲に爆発し、従来同教会の中枢信徒が率先となり、約8割の現住信徒は教会を離れて別団体を作るに至り、この間八木兄の奮闘容易ならず、予もまたどう教会に出張すること五回に亘り、同兄に協力したりと雖も、如何ともすること能はず。茲に至り遂に従来部内第一位に在りし教会も、辛うじて補助教会の面目を保つ域に下りたり。同教会が四十余年の古き伝道歴史と、我がメソジスト教会の体面威信とより考ふるときは、かの変昧的宗教運動の爲め、穩健なる基督教の宣伝が敬はれ、識者をして躓かしむるを見るに忍びず、メソジスト主義擁護の爲め同教会を再び盛り立つべく充分なる御加勢あらんことを希望するものなり。」

「靈火もゆる飯田教会は、分裂のため信徒の大半が去り、以後は小教会として歩みつづける。」

「同教会内に数年醗酵せられたる信仰上の変動は茲に爆発し、従来同教会の中枢信徒が率先となり、約8割の現住信徒は教会を離れて別団体を作るに至り、」この別団体とは、柘植によって創設された飯田基督伝道館であるが、この伝道館にメソジストの信徒が分裂して移ってきたというより、藤村が言うように、「教会教派に係らず、町の空屋を用いて聖会を開いた。・・・この聖会の時より152人猛然立上って、新しき群をなしこゝに伝道館の建設となった」のであり、小林正之が言うように「同志とともにメソジストを脱して飯田基督伝道館を起こし」たのである。

しかし、メソジスト教会の中にすでにその土壤は作られていたといえよう。その事例は、1909年（明治42年）竜丘心霊修養会。1912年（明治45年）飯田靈性修養会を日基と合同にて講師御牧碩太郎を招く。1913年（大正2年）山田ふみ婦人伝道師就任。1914年（大正3年）バックストーンによる靈性修養会をバックストーン、御牧碩太郎招いて開催。1916年（大正5年）日本伝道隊に関わりのある西條彌市郎牧師就任。1917年（大正6年）「至聖会」を結成-下伊那郡下の信徒による教派教会の区別を去って主のために自由に一致して働く。好地好太郎を招く。1918年（大正7年）「至聖会」にて秋山由五郎、ソーントンを招

く。1919年（大正8年）秋山由五郎、柘植不知人、小原十三司による聖会を開催等々によって純福音的な素地が養われてきた。

飯田基督伝道館

1924年（大正13年）2月2日、殿町の借家で、柘植不知人による「飯田聖会」を開催。ここに飯田基督伝道館が設立したのである。その事情を最初の主任牧師となった藤村壮七が記している。その時の伝道師は私の父田添幸雄であり、その後1938～1941年第5代牧師にもなっている。なお、西条は私の「禧雄」の名付け親である。

「此地方は不思議なる魂の要求あって多くの純福音の器も送られたが、大正8年柘植先生を送られ、驚くべき栄光を拝した。所謂大正8、9年のリバイバルは此地より破れ始め、後東京に移ったのであった。久しく渴きて求めつつ在った魂の深き欲求は先生に由って初めて満足した。以来他の人を要せざるに至り、度々聖会を開いて先生を煩はした。

その後純福音を慕へる群は魂に傷を負ひ、靈的飢饉に遭遇し、遂に大正13年2月、教会教派に係らず、町の空屋を用いて聖会を開いた。その時傷を負へる魂は浮塵子の如く押しかけ来り、物凄き光景を呈し、多くの救はるる者、癒さるる者起り、先天性右足関節脱臼で不具者になって居た人の足が直ちに癒されて人々の驚きとなった。この聖会の時より152人猛然立上って、新しき群をなしこゝに伝道館の建設となった。（藤村壮七誌）」

このとき問巻に来た日本メソジスト教会伝道局長波多野伝四朗は、柘植群れを「同派では学問を否定する、医者を否定する、所謂文明を否定するので、狂的な非文明の教会である。このような宗派の起こることを悲しまざるを得ない」と評した。

飯田基督伝道館については、『飯田知久町教会史恵みの中を歩んで』見ていただくこととする。

竜丘基督伝道館

<小島良造・譲 親子の信仰>

小島良造は、1874年（明治7年）竜丘村駄科に小島縫造の長男として誕生。

小林洋吉とは1歳違いであり、親交深かった。洋吉から入信を勧められてもなかなか応じなかったが、遂に29歳の時入信した。その動機は、一人息子の譲が日曜学校へ行きたいといった時、自分でわざわざその宗教が間違いのないものか確かめに行き、これを良しとして日曜学校へ行かせた。それがきっかけとなって自分も信仰の道へと進むに至り、一家をあげて熱心な信者となった。以降、自宅（清水屋）を開放し、クリスチャンホームとして多くの人を憩わせた。小島は、18歳で教職に就き、20歳で正教員となり、28年間教師として勤めた。1924年（大正13年）49歳教職を退き、献身して、柘植の神学校である活水学院へ入学し牧師となった。

譲は病を得て24歳で天に召された。彼は愛していたオルガンを、その時まだなかった竜丘教会に捧げると遺言した。そしてその願いかなって竜丘基督伝道館は誕生した。

竜丘基督伝道館の創立は1924（大正13年）10月である。

<竜丘という所>

竜丘について3人の言葉で紹介しよう。

1. 北沢小太郎

「竜丘は文化の高い村だと、他の町村の有識の方から評された事がある。それに対して、私は素直に、小林洋吉老の様な人物が存在し、何となし村人に影響を与えてきたと思っていると答えた。

勿論一人の力だけではない。だが特別の肩書きがあるのではない。村長でも教育者校長でもない独特の人が割合多くこの村の人々に影響を与えてきたと思う。それらは、小林老を初めとしてたくさんいると思うが。あえて数氏を挙げるならば、漢字学者下田直樹、明治15年「みやま自由新聞」を始めた森多平、次いで、昭和初期組合製糸に独特の献身した岡村勝太郎、農会や農事のリーダーだった中田幸、教員から牧師になって家を伝道館の用にまかせた小島良造、大正デモクラシーの中で自由画の実際教育を始めた木下紫水、そして、数多くの、大正の民主主義自主化運動に働いた文学青年たち。今、顧みると、小林洋吉老を始め村の教育や産業や自治に特色ある影響を与えていたと思われる。その様な独特の影響がこの村の風潮の基になっていたのではなからうか。

私の云いたい事は、竜丘、と云う地域に木綿の野良着姿の、小林洋吉の様な人が居て、人間の生き方について、無言の教えを垂れてくれたのだと云う思いがする。」

2. 下平公一

「竜丘村の村柄というか伝統的な精神文化の特質は、表面的な華やかさでなく、落ち着いた気品と、大らかな明るさと、薫りの高い奥の深さであると思いますが、このようなゆたかな精神文化の育つ風土を培われた貴重な先覚者として小林洋吉先生を忘れることはできないと思います。小林先生が生涯にわたって求め続けられたテーマは、「人間の心」の問題であり「いのち」の問題であろうと思いますが、それがまことの信仰に裏付けられた深い祈りであり、実践であったことに心が惹かれるのであります。」

3. 中平健吉「私が歩んできた道」より

「私は大正 14 (1925) 年生まれであるから、前記の諸先生方から、直接教えを頂いたということは、残念ながらなかったが、個人的には、小林洋吉と小島良造の影響を受けたのである。両氏からというよりは、両氏の弟子である高橋三津平牧師からであるが、内容的には、小林洋吉、小島良造にキリスト教の伝道をした英国人牧師バークレイ・バックストンからである。同牧師は英国国教会の宣教師であったが、来日後は教派としての伝道をせず、無教派の純福音の伝道をした。私もその影響を受け、現在も無教派の立場に立っている。

大正時代に、竜丘にバックストン牧師が伝道をしたクリスチャンの集落があるらしいと知ようになったのは、最近のことである。私が物心ついたのは昭和の初期であるが、バックストン牧師が竜丘に来て、小林洋吉宅を宿として、何日も集会を続けたという話をよく聞かされたものである。

当時はまだ、バックストン牧師の余薫が濃厚で、クリスマス祝会などには、4、50 名の信者が集まっていた。農村の教会としては珍しいことだったと思うが、その原因の一つに、先に述べた竜丘の精神風土（エートス）があったように思う。・・・竜丘伝道館は、バックストン牧師の忠実な承継者であった。」

<なぜ日本基督教団に入らなかったのか>

さて、宗教法人基督伝道隊竜丘基督伝道館が正式名称であるが、どうした理由か定かでないが、昭和16年の「宗教団本法」による日本基督教団成立の時、加盟していないのである。ある信徒の証言では、「私が教団に入ると教団に迷惑がかかるといけないから」と高橋から聞いている。最近伊那基督伝道館の役員の尊父である古い信徒が書き残した「基督伝道隊竜丘基督伝道館沿革史」という手記が出てきた。それには「柘植不知人没後落合基督伝道隊は数年ならずして解散、竜丘基督伝道館は独立を宣し、単立教会として太平洋戦争下の重圧によく耐え且又日本基督教団への合併の際も動かず爾來幾多の試練の中にも柘植先生の創設された基督伝道隊竜丘基督伝道館の名を独り護り…」とある。しかしそんなことで教団に加盟しないですんだのか。

もうひとつ、この教会は私が就任するまで、聖書は明治版元訳の旧新約聖書を使い続けてきた。よく祈り、よく聖書を読み暗記し、柘植先生時代を彷彿とさせるものがあつた。

また、高橋牧師は3代目で45年牧会した。高橋牧師はある時から「活水の群」も含めて他教会との交わりを絶つた。それは、1933年（昭和8年）11月23日飯田基督伝道館で「主の再臨近し」という題でホーリネスの小林廉直と伝道隊の藤村勇による再臨運動の集会があつた。それまでは近隣の教会の集会に参加させていたが、高橋は直感でこれは危ないと信徒を参加させなかつた。果たせるかな飯田基督伝道館は飯田活水教会（現飯田入舟教会）とに分裂した。それ以来没交渉になり、この度私が初めて竜丘・伊那の伝道館に入ったのである。昨年で高橋牧師没後40年であるが、信徒伝道者の助けもあつたが、信徒が主管者となって礼拝を1回も休むことなく守り、献金も無名献金、会計報告もなしという教会になっていた。

<高橋三津平牧師>

少し長くなるが、その高橋三津平牧師の気骨を知る中平健吉の証言を聞きたい。

「北沢小太郎氏については、更に付け加えることがあります。彼は戦争末期平岡の英軍捕虜収容所の職員をしておられました。北沢小太郎氏は有能誠実な

人柄ゆえに収容所長の信頼をえておられ、捕虜との交渉も任せられるようになっていました。二代収容所長久保竜郎陸軍少尉もものわがりのよい人物だったらしく、捕虜の指揮官が提案する捕虜の福利厚生について小太郎氏の意見をよく聞くようになったようです。かくして昭和19年のクリスマスは本国イギリスから届いた慰問品によって当時としてはいくらか盛大に祝うことができたのでした。小太郎氏は、捕虜のための食糧の買い出しに骨身を惜しまず、東奔西走したのでした。戦後この収容所に対する戦争裁判が横浜で開かれました。私も関心があって調べを始めたのですが、戦犯者の数が最初の逮捕（12名）と有罪になった者の数が11名で数が一致しないのです。

私はこれを長年疑問に思って来ました。最近ようやくその謎が解けました。なんと二代目所長の久保竜郎少尉が逮捕はされましたが、途中で釈放になっているのです。この収容所長が軍事法廷の検察官に身の潔白を認められたからに外なりません。小太郎氏はこの助命歎願にも奔走されました。前任者の収容所長の中尉も部下たちの中からも絞首刑がでているのに（5名）。これはまことにもって不思議なことです。察するに小太郎氏の進言に従ってこの収容所長が寛容の心で捕虜を扱ったことによるものと推測されます。その一つにキリスト教による捕虜の慰霊祭がありましたが、これは日本の官憲の発想とは思われませんから、おそらく北沢小太郎氏の発案によるものと思われませんが、考えてみれば、かなり危険を伴うものでした。英軍の犠牲者を現に国の存亡をかけて死闘を続けている日本の立場で英軍慰霊ができるかという問題があり、どこの牧師がこの火中の栗を拾うような冒険を引き受けるかの難問がありました。

小太郎氏は竜丘伝道館の高橋三津平牧師に相談した結果高橋牧師が引き受け、捕虜一同、日本人官民多数出席して盛大に慰霊祭が営まれました。高橋牧師は、慎重に言葉を選んで日本語で、旧約聖書の歴史の例話を引いて説教をしました。そのために、日本人によく理解できなかったのですが、英軍の将校には通じたのです。その内容は歴史を支配する神は苦難の中から必ず導き出される。諸君は安心して日本の官憲に従え、そうすれば解放は近いというものでした。将校たちは目を輝かして聞き、終わるや進み出て、敵地で福音を聞くことが出来るとは、と絶句して感激ひとしおであったといえます。この説教は英国人の魂の琴線にふれたようでした。私はこの説教が英軍の原隊の日記にどのように書か

れているか確認したいと願っております。」

おわりに

たいへん乱雑な、資料の羅列による、竜丘基督伝道館の系譜を記したが、願わくはご批判、修正等ご教示をいただければ幸いである。

(日本基督教団隠退教師・竜丘基督伝道館牧師)